

一、四辻家傳來の宸筆

十一日。四辻殿公より土師清太夫迄被仰越候。後陽成院七歳の御時、聖廟の名號被爲遊、四辻家に傳來被成候。藤原氏に候故、指て御用に無之候。於御家者御氏神の事に候條、進上被成度候旨則達御聽候處、被掛御心被仰越段御大慶被成候。左候は、被仰請度候。追ては御領内の聖廟へ可被納候旨、可申入旨被仰出。則今夕四辻殿旅館へ罷越、申達候處御對面にて、右の趣御怡悅の旨則被進候。且又御代々御高恩の事に付、此度御來臨御禮御申述有度、高家衆へ御相談候へども難相調、御残念の由被仰越候。

一、竹田忠張より菊を贈られるに

十八日。忠張より菊花たうべけるまゝ、短冊に書て遣ける。

草枕つゆをいかにと問ふ人のそでにたぐへてめづる白菊

一、室直清に和する歌その他

直清より楊柳綠重蜀魄稀。武城遠客幾時歸。行雲不入高人夢。日々江頭爲雨飛。

と書て被贈けるまゝ、稀の字を和してつかはしける。

故郷にしかじとてこそかへらんやま郭公こそ稀なる

此日の口占夏夜述懐

世をいとふこゝろの雲に風絶えて涼しき影も夏の夜の月

螢

露むすぶ淺茅かもとをよそにしてたまの臺に行く螢かな

旅宿五月雨

思ひわく方こそなけれ草枕ゆふべわびしき五月雨のころ

寄窓橘戀

袖の露うきたる名のみ橘のかをりうれしき夢のなごりに

故郷落葉

古郷は日かけの草に霜さえてちる紅葉ばも色なかりけり

曉千鳥

浪よする磯のたま屋の軒しろき有明の月に千鳥鳴くなり

難波江のあしの枯葉の風の音に思へ憂世の春の夜のゆめ

火中蓮といへる心を

よしあしもしらぬ心の池にこそ思にもえぬ花はさかまし

十月清霜重。飄零何處歸。といへるこゝろを

飛螢おもふや秋の霜夜にはおのが光のかひもあらましを

竹陰といへる幽標を題にて

吳竹のなほきを友とすむ人のこゝろしらるゝ庭のやり水
世中のうき一ふしの隔てとやうえけん軒のいさゝむら竹

郭公歸山

一聲のわすれがたみやほとゝぎす入ぬる山の峯のむら雨

樹陰夏風

玉かしはしげれる蔭に夕すゞみわするゝ度に通ふ秋かぜ

水邊旅宿

河浪の音にもしぼるたもとかな草しく床の夢のなごりに

富士

麓經てけふは幾日の旅路にもあかずみゆきのふじの芝山

逢坂關

したひみる宿の梢を隔つれど名はむつまじき逢坂のせき

一、夢得の一首

廿五日。夜夢中得件之一首。

在て世に憂を重ぬる世なりとも思ふ人とは住べかりける
今曉めさめて侍りけるに、曉方雨のふりけるを聞て。

堪てやは□しく床に夢覺てまくら□らふあかつきのあめ

一、賢聖御屏風の摹寫

六月朔。賢聖御屏風出來に付入御覽。是山本孫八郎基庸所奉也。抑賢聖御障子銘の事、於入木道殊所深秘也云。然に去年基庸在京の内、基時卿免許有之。今禁裏賢聖の銘先年基時卿染筆也。其留を以て所摹贍也。素絹各染五色也。歸郷の後其趣達公聽以奉獻之。則八折御屏風一雙被命也。一折に二枚宛也。悉皆三十二枚也。將又高野山無量壽院主依頼して、愛染堂一切經藏の兩額調之。其彫出來、此度の序に入御覽也。高野山は往昔御幸の地に付、勅額相傳の人ならずしては不被用云。

一、山本基庸の染毫を謝する歌

兼て懇望に付、基庸古歌仙一帖染毫賜之。依て謝之。

ことの葉の花を浮べてみづくきの流たえせぬ詠なるらん

此間の詠立春

霞して春やきぬらんほのゝと明ゆく空の雲ぞにほへる
月花のゆうべの霞それながらけさ立かへる春のあけぼの
いひしらぬ春の光やあらし吹く高嶺も今朝は打霞みつゝ

山霞

かけ深き春の心の色ならむさやにもあらず山のかすめる